

## 音声研究と音声教育

小松 雅彦 / 相原 昌彦

言語教育において、これまで音声教育はあまり実践されてこなかった。しかし、2017年度には、日本音声学会から文部科学省に対して「指導要領に定める英語音声教育実現のための提言」が出され、また、文部科学省の「外国語（英語）コアカリキュラム案」には英文法などと並んで「英語の音声の仕組み」が明記された。本研究グループでは、幅広く音声とその教育について研究を行う。

本研究グループでは、5言語（イギリス英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語）の音声データを含む多言語音声コーパス

MULTEXT Prosodic Database (1998) のアメリカ英語版の作成を進めている。本年度は、昨年度収録したアメリカ英語音声とMULTEXTのイギリス英語音声の比較を、速度、リズム、イントネーションから行っている。分析データの量がまだ少なく断定的なことは言えないが、分析した範囲内では、イギリス英語とアメリカ英語はほぼ一貫してリズムを表す音声学の指標に差が見られた。主観的にイギリス英語の方が「テキパキ感」があるとも言われ（小川・マケックニー, p. 3）、それと関連している可能性がある。

